

創立 60 周年を迎えて  
日本オーディオ協会の新たな役割

一般社団法人 日本オーディオ協会  
会長 校條 亮治

一般社団法人日本オーディオ協会は、今年創立 60 周年を迎えました。ソニー創業者の井深大氏と中島健蔵氏の強い信念の下、1952 年（昭和 27 年 10 月 4 日）に「日本オーディオ学会」として創立されました。同年 12 月には早くも「全日本オーディオフエア」が 12 月 4 日～7 日の三日間にわたり開催されました。さらに、翌年 5 月には早くも「日本オーディオ協会」と改組し、行動する組織として活動開始しています。そして今日まで多くの諸先輩方の熱い意志と努力により、我が国電子機器産業と再生音楽文化に多大な足跡を残すことができました。その努力に対し、大いに感謝をし、敬意を表する次第です。私たちは後を継ぐ者として、その功績を無にすることなく、次代の発展に向けた新たな道筋と、具体的な行動を明らかにする義務があると、強く認識するところです。

今年はエジソンが錫箔蓄音機(ティンホイール)を発明して 135 年、ベルリナーの円盤蓄音機が発明され 125 年です。世界の学術的議論ではこれが「オーディオ」の始まりとしているようです。そして世は、スマートホンにより、瞬時に好きな楽曲を取り出し、ヘッドホンやイヤホンで素晴らしい音質で聴くことができるようになりました。この間、技術は目覚ましい進歩を遂げ、物理的オーディオの世界から、電気信号系オーディオの世界へと変わり、さらに信号系はアナログからデジタルへと大きく変遷し、材料や方式も幾多の改良がなされ、現代の小型・高音質・高感度機器へと変わりました。この結果、その対価も大きく変わり、今や小学生においてもお年玉で購入でき、誰でも！いつでも！どこでも！その恩恵にあずかれるようになりました。

しかし、一方で利便性のあまり、私たちが本来求めた「音楽試聴による感動創出」はとても希薄になってしまいました。エジソンの開発真意は別として、大きなホールへ行かなければ聞けなかった「音楽」を居ながらに聞けるようになった感動は、もはや遠い存在と言わざるを得なくなりました。しかし、本当に消費者は人々が現状に満足をしているのだろうかという疑問もあります。「オーディオ試聴」あるいは「音楽拝聴」とはもっと文化的な奥の深いものではないかという疑問です。

私たちは、日本オーディオ協会が創立された理念に立ち返り、今一度「感動創出」に向けた活動強化が必要ではないかと云う提起を「中期事業検討委員会」で行いました。それには再度、技術的見地によるバックボーンが必要であるとの見解です。これは単にノスタルジアではなく最新の技術に裏打ちされるものではなくてはなりません。具体的には今期方針として「放送・通信・新音源検討委員会」及び「技術会議」を新設します。これらを基軸に現在の生活、もしくは将来の生活スタイルを見据えた技術的課題と提案を、積極的に関係業界、企業、行政、消費者に訴えて行きたいと考えています。これこそ協会設立の理念である「良い音を、良い環境で」の飽くなき追及ではないかと考えます。皆様と力を合わせてオーディオ文化の再構築に向けて活動していきたいと思っております。